

中学部研究の概要（４年次）

1 研究対象教科

国語科

2 中学部研究の方向性

(1) これまでの研究の成果と４年次研究の方向

本研究は４年間の系統的な取組として進めてきた。１年次は作業学習を対象に、仲間と共通の目的に向かって意欲を持続しながら活動に取り組む姿を目指した。農作業を中心に「具体的なヒト・モノ・コト」と子供を結び付けることで、「野菜を育てたい」「柵を作りたい」といった主体的な思いを引き出すことができた。

２年次は数学科を対象に、体験的・実地的な活動を重視して授業づくりを行った。具体物の操作や生活場面を取り入れ、繰り返し数を数えたり数量を比較したりするなど、生活に根ざした数学的な学びに意欲的に取り組む姿が見られた。

３年次も数学科を継続し、「関心を持って学び続ける支援」を軸に授業づくりを進めた。学習課題の達成に向けた「目的意識」を喚起し、制作や発表などの活動を通して「好奇心」を高めることを意図した。その結果、「中学部全体のお楽しみ会で使用するしゃぼん玉液づくり」という学部全体の行事に関わる活動を通して学んだ「かさ」の概念を、給食や作業学習などの日常生活の場面に応用する姿が見られた。このように、数学科の学びが他教科や生活に広がり、新たな問いや「もっとできるようになりたい」という意欲につながっていったことは大きな成果であった。

４年次研究では、これらの成果を踏まえて国語科を対象とする。子供が学習に主体的に取り組み、学んだことを自らの生活や他教科に生かそうとする姿をさらに広げていくために、国語科の資質・能力を育成する授業づくりに取り組んでいく。

(2) なぜ、国語科なのか

中学部では、各教科等の資質・能力の着実な育成に向け、教科別の指導と各教科等を合わせた指導のそれぞれの良さを生かしながら、教科の系統性を踏まえた学習を行うとともに、学習と子供の生活のつながりを大切にしながら指導を行っている。その中で、数学では、加法や減法の計算は理解しているものの、文章問題となると内容を正確に捉えられず、正答に至らない姿が見られた。この課題には、国語科の「読むこと」で培う、文章や説明文の要点を捉える力や、主語と述語や接続詞の関係を理解する力が必要となる。また、理科では、実験や観察をレポートにまとめる際に、気付いたことがあっても、不必要な情報を多く記したり、必要な情報が不足したりして、伝えたいことが十分に伝わらない姿が見られた。この課題には、国語科の「書くこと」で育成する、相手に伝わりやすく伝える力や、情報の順序や関連を整理する力が必要となる。さらに、美術の鑑賞で、気に入った作品を選択することはできても、理由や感じたことを言語化することが難しい姿が見られた。この課題に対しては、国語科の「聞くこと・話すこと」で学ぶ、自分の考えや感想を相手に伝える力が関わっている。

学習指導要領においても、「言葉は、生徒の学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、すべ

ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである」と述べられている。これら子供の実態等を踏まえ、国語科の資質・能力を高めることが、他の教科等の学びの充実につながると考え、4年次研究では国語科を対象として、主体的に学ぶことができる授業づくりに取り組んでいくこととした。

3 中学部研究の内容と方法

(1) 研究の内容

4年次研究は、国語科を取り上げて実践研究を行う。研究内容は次のように設定した。

- 国語科の資質・能力の着実な育成に向け、習得の先にある課題の達成に向かって目の前の学習に取り組み、国語科の内容に関する問いを持って主体的に学ぶことのできる学習活動や支援の在り方を明らかにする。

(2) 研究の方法

授業を構想する際には、子供の実態から、どのような力を身に付けさせたいのか明確にする。その上で、学習指導要領に示された目標及び内容を基盤として、単元の目標を設定する。また、適切に評価を行うために、単元の各次で中心的な学習活動を行う場面など、評価の場면을精選して評価計画を作成し、一人一人の授業における引き出したい姿を次ごとに明確にしながら授業を展開する。さらに、単元を進める中で、子供の具体的な姿をもとに評価を行うことで、目標達成状況を振り返りながらより良い支援や学習活動となるよう授業改善を行う。

学習活動の支援の在り方については、まず子供が「学んだことを生かして課題を達成しようとする目的意識」を持てるようにする。その上で国語科の内容に関心を向け、自分なりの問いを持って主体的に学ぶことができるような授業を構想していく。授業では、子供の具体的な発言や学習に取り組む姿、成果物等について、授業者間で話し合いによる分析を行い、学習活動や支援の在り方について検討する。

4 4年次研究の取組

今年度の中学部研究では、習得の先にある課題の達成に向かって目の前の学習に取り組み、国語科の内容に関する問いを持って学ぶ姿を引き出すことを目指す。そのために、「関心をもって学び続けるための支援」を講じ、「好奇心・目的意識」「見通し」「学ぶ喜び」を持つための具体的な支援を以下のように構想していく。

(1) 好奇心・目的意識を持てるようにするための手立て

子供が何のために国語の学習に取り組むのか理解することを重視する。具体的には、「〇〇を成功させたい」といった学習課題の達成に向けた目的意識を喚起する。そのために、学校行事や他の指導の形態などに関連させた、制作や発表などを取り入れた課題を設定する。例えば、「丁寧な言葉を使う」「伝えたい事柄を整理して書く」学習において、地域の人やお世話になった先生に運動会の招待状を書く活動をすることで、「たくさんの人に来て欲しい」という目的意識を持ち、課題の達成に向けて主体的に取り組むことができると考える。

さらに、子供が国語科の内容に着目できるように、既習の知識や技能では解決できない課題を提示し、「上手いかない」「何か足りない」という思いを持つような状況を設定する。例えば、始めにメモを取らずに話を聞くと、内容を忘れてしまう場面を体験させ、「どうすれば忘れずに聞くことができるか」という問いを引き出す。また、ビデオメッセージのやりとりの中で、伝えたい内容が誤って伝わったり、相手から「もっと詳しく知りたい」と返されたりする体験を通して、「うまく伝わっていない」という気付きを促し、「もっと詳しく伝えるにはどうしたらいいのか」という問いにつなげる。このように子供の「好奇心」を喚起する状況を作り出し、その思いや気付きが国語科の学びに結び付くようにする。

また、単元の進捗と合わせて、新たな課題の提示やこれまでの学習や思考とのずれを生むような発問をすることで、好奇心を継続的に高め、国語科の内容に関する問いを持ち続けられるようにする。

(2) 見通しを持てるようにするための手立て

問いを持った子供が、「こうやって取り組んでみよう」と、学習活動の進め方をイメージできるように手立てを講じる。

その際、「取組方の選択」に重点を置く。具体的には、教師のモデル提示や、実際の体験により、「この取組方ならできそう」という思いを持てるようにする。また、子供同士が互いの取組を見合えるような環境構成にしたり、取組方を紹介し合う場面を設定したりするなど、どのように取り組むかを子供自身が考えることができるようにする。さらに、子供にどのように取り組むか問い掛けたり、複数の取組方を試した上で選択できるようにしたりすることで、課題解決に向かおうとする意識を高め、より主体的に学習に取り組んでいけるようにする。

(3) 学ぶ喜びに気付けるようにするための手立て

子供が「教科等の内容の価値」と「自分自身の価値」に気付けるように手立てを講じる。

まず、「教科等の内容の価値」については、「詳しく伝えるためにどうすれば良いか」など、国語科の学習を通して分かったことやその良さに気付くことができるように、活動中の子供の姿や成果物の中から、できていることを教師が見取り、子供と一緒に確認し、称賛する。また、1単位時間の終盤に行う振り返りで、分かったことやできたことを発表し合う時間を設定したり、振り返りシート等を用いて分かったことやできたことをまとめて整理する時間を設定したりする。

次に「自分自身の価値」については、課題を達成したことを具体的に称賛し、「できた」という思いを持てるようにする。その上で、活動中に自分が選択した取組方で成果が出たことに対して即時的な称賛をしたり、「こうやって取り組んでいるんだね。」と言葉掛けをしたりするなど、取組方に意識が向くような働き掛けをする。また、振り返りの場面において、分かったことやできたことの理由を子供自身が分かるように、「〇〇したから△△できたね。」と、取組の過程と成果を結び付けて価値付ける。また、子供の実態に応じて、どうやって取り組んだらできたのか問い掛け、子供自身が取組の過程と成果を結び付けて気付くことができるようにする。

(文責 金子 優衣)